



大学の巨大な講義室を埋め尽くしていた学生たちのざわめきが、教授の「今日の講義はここまでとします」というくぐもった声と共に一気に爆発した。

初夏の陽射しが、高い位置にある窓から斜めに差し込み、空中に舞う微細な埃をキラキラと照らし出している。二百人は収容できるすり鉢状の教室には、解放感と週末に向けた浮き立った空気が充満していた。

私は手元のノートパソコンをパタンと閉じ、画面に映っていた難解な経済学のレジュメから視線を外した。凝り固まった首を軽く回すと、ポニーテールにまとめた髪の毛先が背中ですくすく揺れる。

大きく息を吐き出しながら、机の上に広げていたペンケースやバインダーを無駄のない動作でトートバッグへと放り込んでいく。

「あー、やっと終わった。今日の講義、マジで眠気との戦いだったよ」

隣の席で大きく伸びをしたのは、同じ学部友人である麻衣だった。彼女は長い髪をかき上げながら、不満げに唇を尖らせている。

「麻衣、昨日もサークルの飲み会で遅かったんでしょ。自業自得だよ」

「だってさー、新入生歓迎の時期だし、先輩からの呼び出し断れないじゃん。綾乃はいいよね、そういうの適当にかわしても誰も文句言わないんだから」

「適当にかわしてるわけじゃないよ。ただ、自分の時間を無駄にしたくないだけ」

私は肩をすくめながら、立ち上がってバッグを肩にかけた。

麻衣の言う通り、私はサークルや学部の飲み会には必要最低限しか顔を出さない。もちろん、人付き合いを完全にシャットアウトしているわけではないが、生産性のない愚痴の言い合いや、誰が誰と付き合っているといったゴシップ話に何時間も費やすのはご免だった。

入学当初は、私のそういう少し冷めた態度を「すかしている」「顔がいいからって調子に乗っている」と陰口を叩く人間もいたらしい。

確かに、私は昔から容姿について他人から評価されることが多かった。すれ違いざまに振り返られたり、初対面の男性から過剰に優しくされたりするのは日常茶飯事だ。けれど、それが自分の実力だと思ったことは一度もない。ただ両親から受け継いだ遺伝子の配列が、たまたま世間の好むバランスに近かったというだけの話だ。

美人であることは、時としてひどく厄介だ。自分の内面を知ろうともせず、ただ「隣に歩

かせるトロフィー」として私を欲しがる男性の何と多いことか。

だからこそ、私は誰かに寄りかからず、自分という芯をしつかり持つて生きようと心に決めている。人に流されず、自分の意見をはっきりと言い、毅然とした態度を崩さない。そうしていれば、中身のない薄っぺらな人間は自然と離れていくからだ。

講義室の狭い通路を抜けて廊下に出ると、ひんやりとした空調の風が火照った肌を撫でた。

その時だった。

バッグの中に入れていたスマートフォンが、ブブツ、ブブツ、と短く二回振動した。

歩きながら何気なく画面を取り出し、ロック画面に表示された通知に目を落とす。

その瞬間、私の心臓がドクンと嫌な音を立て、指先からスツと血の気が引いていくのを感じた。

『通知：user\_77492a から新しいメッセージが届いています』

インスタグラムのダイレクトメッセージ。アカウント名は適当な英数字の羅列で、プロフィール画像は初期設定の真っ白な人型のアイコンだった。

いわゆる、捨て垢と呼ばれるものだ。

私は周囲に気づかれないうように小さく息を呑み、震えそうになる指を必死に抑え込みながら、そのメッセージのプレビューを開いた。

『綾乃、講義終わった？ 今日も一番後ろの窓側の席に座ってたね。あの席、クーラー直撃して寒いでしょ。俺がいたら上着貸してあげられたのに。ねえ、いつになったら俺のこと許してくれるの？ もう一週間も声聞いてないよ。苦しいよ』

吐き気がした。

胃の奥底から込み上げてくるドロドロとした嫌悪感と、得体の知れない薄ら寒い恐怖。

周りを見渡しても、すれ違う大勢の学生たちの中に、私を見ている不審な人物は見当たらない。それでも、背中をねつとりとした視線が這いずり回っているような錯覚に陥り、思わず自分の二の腕を強く摩った。

メッセージの送り主は、間違いなく元カレの『達也』だ。

つい一ヶ月前まで付き合っていた、他大学の三年生。出会った頃は優しく、私の話をよく聞いてくれる穏やかな人だと思っていた。

けれど、付き合いが長くなるにつれて、彼の異常なまでの依存体質と束縛が露わになっていったのだ。

私のスマホを勝手に見ようとしたり、男友達の連絡先をすべて消すように要求してきたり。私がサークルの集まりに行こうとすると不機嫌になり、果ては「綾乃は俺がいなくて何もできないんだから」「俺が守ってあげるから、お前は俺のそばにだけいればいい」と、私の意思や交友関係をすべてコントロールしようとしてきた。

極め付けは、彼の将来のビジョンだ。就職活動の時期が近づいているというのに、彼は何も行動を起こそうとせず、「綾乃が就職したら俺を養ってよ。ずっと一緒にいられるじゃん」などと本気で口にしたのだ。

呆れ果てた。

お互いを高め合うこともできず、ただ自分のちっぽけな独占欲を満たすために私を鳥籠に閉じ込めようとする男。未来への展望すら持たず、私に寄生しようとするその姿勢を見た瞬間、私の中で彼への情は完全に冷め切った。

だから、キッパリと別れを告げた。

「あなたのそういう重いところも、未来に向かって努力しないところも、全部無理。二度と連絡してこないで」と。

達也は泣いてすがりつき、最後には「俺を捨てるのか」「お前は俺の所有物だ」と声を荒

げたが、私は一切振り向かず、その場を去った。

それで終わったはずだった。

しかし、彼は別れを受け入れていなかった。

LINEをブロックしても、着信拒否にしても、彼は手を変え品を変え私に接触を試みってきた。ついに私のSNSアカウントを突き止め、ブロックするたびに新しい捨て垢を作っては、こうして執拗にメッセージを送りつけてくるようになったのだ。

最初のうちは『ごめん、俺が悪かった』『もう一度チャンスをくれ』という縋るような内容だった。だが、私が完全に無視を貫いていると、次第にメッセージの内容はエスカレートし始めた。

『昨日、駅前のカフェにいただろ。一緒にいた男、誰？』

『俺以外の男と笑うな』

『お前は俺のものなんだから、逃げられると思うなよ』

それはもう、未練などという生易しいものではなく、明確なストーカー行為だった。

今日のメッセージに至っては、私がついさつきまで座っていた講義室の座席の位置まで正確に把握している。どこから監視されている。同じ空間のどこかに、あの執念深い男が息

を潜めている。

そう考えただけで、足の震えが止まらなくなりそうだった。

「……綾乃？　どうしたの、立ち止まって。忘れ物？」

数歩前を歩いていた麻衣が、不思議そうな顔をして振り返った。

私はハッとしてスマホの画面を伏せ、強張った顔の筋肉を無理やり動かして平穏な作り笑いを浮かべた。

「ううん、なんでもない。ちよつと変なスパムメールが来てただけ」

「なんだ、びつくりした。綾乃がそんな深刻そうな顔するからさ」

「大げさだなあ。ほら、早く行こう。今日、サークルの部会がある日だよね？」

私は彼女の背中を軽く押し、努めて明るい声を出して歩き始めた。

誰かに相談すべきなのかもしれない。警察に駆け込むべきなのかもしれない。でも、明確な実害がない現状で、どこまで真剣に取り合ってもらえるかわからない。何より、こんな気味の悪いトラブルに巻き込まれているという事実を認めることが、自分の弱さを露呈するようでひどく悔しかった。

私は瀬戸綾乃だ。こんなクズみたいな男の執着に怯えて、自分の生活を脅かされるなんて



絶対に認めない。

強気な性格が災いしていることはわかっていたが、私は一人で抱え込み、ただひたすらに無視し続けることしかできなかった。

スマホの電源を完全に切り、バッグの奥底へと押し込む。

見なければいい。気のせいだと思えばいい。

そう自分に言い聞かせながら、私は麻衣と共にキャンパスの奥にある学生会館へと向かった。

\*

私たちが所属しているのは、大学内でも有数の規模を誇るイベント企画サークルだ。

学祭の運営サポートや、地域のボランティア活動、他大学との交流イベントなど、活動内容は多岐にわたる。所属人数も百人を軽く超えており、真面目に活動する層から、ただ出会いや飲み会を目的とした層まで、様々な思惑を持った学生たちが入り乱れるカオスな集団だった。

学生会館の三階、サークルの部室として割り当てられている大部屋のドアを開けると、すでに多くの学生が集まっており、熱気と騒音に包まれていた。

「おっ、瀬戸と麻衣ちゃんじゃん。お疲れー」

「こつちこつち！ 今、次の新歓合宿の班決めについて話してたところ」

私たちが顔を出すなり、部屋の中央のソファ席を陣取っていた男子の集団から声がかかる。

麻衣は「お疲れ様ですー！」と愛想よく手を振り、すぐに彼らの輪の中へと混ざっていった。彼女はこういう大人数でのコミュニケーション能力が高く、誰とでもうまく立ち回れるタイプだ。

私は「お疲れ様です」と軽く会釈だけをして、彼らの輪には入らずに少し離れた窓際の丸テーブルへと向かった。大人数でワイワイ騒ぐのは苦手だし、何より今は、ストーカーの恐怖から少しでも気を紛らわせるために静かに過ごしたかった。

窓際のテーブル席にバッグを置き、椅子を引き寄せて腰を下ろす。

ふと視線を上げると、テーブルの向かい側の席に、見知った顔が座っていることに気がついた。

成海朔也。

同じ学年、同じ学部、そして同じサークルに所属する男子学生だ。

人数が多いサークルとはいえ、学部も同じとなれば顔を合わせる機会は自然と多くなる。ただ、私たちは互いに「顔と名前は知っていて、すれ違えば挨拶くらいはする」という、極めて薄い関係性でしかなかった。

今日の彼は、黒のシンプルなカットソーの上に、少しサイズの大きなカーキ色のシャツを羽織っている。どこにでもいる大学生のようなカジュアルな服装だが、彼が着ると不思議と洗練された印象を与えるからズルい。

少し色素の薄い髪が前髪の隙間から彼の端正な目元を隠し、スツと通った高い鼻梁と、無駄のない鋭いフェイスラインをより際立たせている。客観的に見ても、彼はサークル内はおろか、大学全体で見ても上位に食い込むほどの整った容姿を持っていた。

当然、彼を放っておく女子はいない。サークルに入った当初から、「あの成海って人、めちゃくちゃカッコよくない?」「彼女いるのかな」と、女子たちの間で頻繁に話題に上がっていたのを覚えている。

だが、成海朔也という男は、実に掴みどころがない人間だった。

これだけのルックスを持ち、普段から学部のカースト上位にいるような男子グループに属してはいるものの、彼は決してその中心で調子に乗って騒ぐような真似はしない。

現に今も、彼の友人たちは部屋の中央で女子たちと合コンまがいのノリで騒いでいるというのに、成海はそこから一人抜け出し、この窓際でイヤホンをして何かを観ている。手元のタブレット端末の画面には、字幕付きの古い洋画が流れていた。

孤高の一匹狼を気取っているわけでも、ノリが悪いわけでもない。声をかけられれば普通に笑顔で返すし、飲み会にも顔を出すことはある。

ただ、彼は明らかに「飢えていない」のだ。

周りの男子たちが、いかに女子の連絡先をゲットするか、誰が一番可愛いかという話題で血眼になっている中、成海だけは常にどこか一歩引いた場所からその光景を眺めているような気がする。

女子に対しても特別冷たいわけではないが、ガツガツと媚びを売るようなこともしない。まるで、「自分の世界が確立されているから、他人の評価や浅い恋愛<sup>ぶ</sup>こころには興味がない」とでも言わんばかりの、絶対的な余裕。

それが、成海朔也という男に漂う独特の色気であり、同時に私が彼に対して「少し得体が

知れない」と感じる理由でもあった。

「……成海くん、お疲れ」

向かいに座ってしまった手前、完全に無視するのも不自然だと思い、私は軽く声をかけた。

私の声に反応した彼は、タブレットの画面からゆつくりと視線を上げ、片耳のイヤホンを外した。

「あ、瀬戸。お疲れ。講義終わり？」

低く、少し気怠げな声。けれど、不快感を感じさせない絶妙なトーン。

「うん、今終わったところ。成海くんも同じ経済史の講義だったんじゃないの？」

「俺は代返頼んでサボった。あの教授の話、子守唄にしかないから」

悪びれもせずにそう言い放ち、成海は小さく笑った。

そのあっけらかんとした態度に、私も思わず肩の力が抜けてわずかに頬が緩む。

「真面目な顔してタブレット見てるから、てっきり勉強でもしてるのかと思ったら。映画

画？」

「ん。フランス映画。なんか無性に見返したくなってきた」

「ふうん……。あつちの輪には混ざらなくていいの？ 合宿の班決め、もう勝手に決められちゃうよ？」

私が部屋の中央で騒いでいる集団を見やると、成海はちらりとそちらへ視線を向け、どうでもよさそうに息を吐いた。

「俺は誰とでもいいよ。あいつら、可愛い一年生と同じ班になることしか考えてないから、俺が混ざると逆に邪魔になるし」

「なるほどね。よくわかってるじゃない」

「瀬戸こそ、あつちに行かないの？ 麻衣ちゃんはすっかり馴染んでるけど」

成海の視線を、真っ直ぐに私を射抜く。

その目は、ただの世間話をしているような温度感でありながら、なぜか私の内面の奥深くを見透かそうとしているような、奇妙な鋭さを持っていた。

「私はいいの。うるさいの苦手だし」

私はそっけなく答え、視線を窓の外のグラウンドへと逸らした。

成海と話していると、なぜだか自分のペースが乱されるような感覚になる。彼の持つ絶対的な余裕が、今の私の不安定な心を浮き彫りにしてしまうようで、無意識のうちに壁を作っ

てしまうのだ。

「……ふーん」

成海はそれ以上深く追求してくることはなく、再びイヤホンを耳に戻してタブレットの画面に視線を落とした。

会話が途切れ、再び静寂が訪れる。

部屋の中央からの騒声がBGMのように流れる中、私は窓の外をぼんやりと眺めながら、先ほどのストーリーカーのメッセージを思い出していた。

『同じ空間のどこかに、あの男がいるかもしれない』

その考えが再び頭をもたげた瞬間、急激に息が苦しくなり、心臓の鼓動が不快なリズムを刻み始めた。

私は無意識のうちに自分の両腕を強く抱きしめ、小さく身震いをした。

「……瀬戸」

不意に、名前を呼ばれた。

ビクツと肩を跳ねさせて振り返ると、イヤホンを外した成海が、タブレットを置いてじつところらを見つめていた。

「え、なに？」

動揺を隠すように、少しだけ声を張り上げてしまう。

成海はいつもの気怠げな表情のままだったが、その瞳の奥には、先ほどまでの「興味のないさそうな大学生」の仮面を一枚剥ぎ取ったような、冷たくて暗い光が宿っているように見えた。

「なんか、顔色悪くない？ 具合でも悪いのか」

「えっ……？」

私は咄嗟に自分の頬に手を当てた。

「別に、普通だよ。ちよつと講義で疲れちゃっただけだから」

慌てて取り繕うように笑ってみせる。誰にも気づかれていないと思っていた私の僅かな動揺を、この男はこんなにも的確に拾い上げている。

「……そ。ならいいけど」

成海はそれ以上踏み込んでくることはなく、ふつと視線を外して再び映画の世界へと戻っていった。

その淡白な反応に安堵する一方で、私は彼の背中に見えない何かを探るように、しばらく



視線を釘付けにされてしまった。

成海朔也。

ただの顔がいいだけの、同級生。

彼が私の抱える真っ暗な泥沼に、あんな形で強引に踏み込んでくることになるなんて、この時の私はまだ知る由もなかった。

窓の外では、初夏の風が青々とした木々の葉を揺らし、平和な大学の日常がどこまでも続いているように見えた。

だが、私の中の日常は、確実に、そして静かに崩れ去ろうとしていた。見えないストーカーの狂気と、目の前にいる掴みどころのない男の存在。

この二つの要素が交差した時、私の人生がどれほど激しく、そして甘く狂わされていくのか。

それは、もうすぐそこまで迫っている、逃れられない運命の足音だった。

泥のような暗闇の中を、息を切らして走り続けていた。

背後から、ひた、ひた、と粘りつくような足音が一定の距離を保ってついてくる。振り返ってはいけない。本能がそう警告しているのに、恐怖で足がうまく前に進まない。足元はぬかるみ、靴底が重く沈み込んでいく。

背中を撫でるような冷たい風。そして、耳元で突然、聞き慣れた男の声がぬちやりと囁いた。

『綾乃、どこに行くの？』

「っ……っ！」

声にならない悲鳴を上げ、私は勢いよく上半身を起こした。

心臓が肋骨を突き破りそうなほど激しく脈打ち、パジャマの背中にはびつしよりと冷や汗が張り付いていた。荒い呼吸を繰り返しながら、暗闇の中で焦点の合わない目を彷徨わせる。

カーテンの隙間から差し込む街灯の微かな光で、見慣れた自分の部屋の輪郭がぼんやりと

浮かび上がった。夢だ。ただの悪夢。

震える手を伸ばしてサイドテーブルのデジタル時計を確認すると、緑色の文字盤が『2…14』という数字を無機質に表示していた。

「また、こんな時間……」

深い溜息とともに、ベッドのヘッドボードに力なく背中を預ける。

最近、まともに眠れた夜がない。布団に入って目を閉じてても、脳が過覚醒を起こしたように冴え渡り、静寂の中で存在しないスマホの通知音が空耳となって何度も響くのだ。

自分では全く気にしていないつもりだった。あんな男の執着なんて、私という人間の核を揺るがすほどの価値もない。徹底的に無視していれば、そのうち飽きて消えていくだろうと、昼間はあんなにも気丈に振る舞っていたのに。

一人の夜になると、理性で押さえ込んでいた恐怖と不安が、じわじわと心の隙間から染み出してくる。精神の根っこから少しずつ、確実に蝕まれているのがわかった。慢性的な寝不足のせいで、身体の芯には鉛のように重い疲労感がこびりついている。

私は重い身体を引きずるようにしてベッドから降り、フラフラとした足取りで洗面所へと向かった。

冷たい洗面台の縁に手をつき、顔を上げて鏡を見る。蛍光灯の白々しい光の下に晒された自分の顔は、思わず目を逸らしたくなるほどに酷い有様だった。

自慢だった白い肌は不健康な土気色にくすみ、目の下にははつきりと青黒い隈が刻まれている。唇はカサカサに乾き、目元は落ち窪んで生氣がない。

「……ひどい顔」

大学で美人ともてはやされている瀬戸綾乃の姿は、ここにはなかった。そこにあるのは、見えない影におびえ、疲労困憊してボロボロになった、ただの哀れな女子大生の姿だった。

蛇口を捻り、両手にすくった冷たい水で何度も顔を洗う。バシャバシャと音を立てて水滴を散らし、タオルで乱暴に顔を拭いた。それでも、鏡の中の陰鬱な表情は晴れない。

どうして、こんなことになってしまったのだろう。

洗面台の鏡を睨みつけながら、私は無意識のうちに過去へと意識を飛ばしていた。

元カレの達也と付き合い始めた当初は、まさかこんな地獄のような結末が待っているなんて、想像すらしていなかった。

彼は他大学の三年生で、サークルの合同イベントで知り合った。最初の印象は、とにかく穏やかで気の回る優しい先輩だった。私が何気なく口にした好きな映画や音楽の話を真剣に

聞いてくれて、趣味が合うことで急速に距離が縮まった。

私が少し気が強くて生意気なことを言っても、彼は怒るどころか「綾乃ちゃんはしっかりしててすごいね」と笑って受け止めてくれた。誰もが私の容姿ばかりを褒める中、彼は私の内面を見てくれていると、そう信じ込んでしまったのだ。

でも、それはただの巧妙な偽装に過ぎなかった。

彼は私の内面を愛していたのではない。気の強い私を自分の思い通りにコントロールし、支配下に置くことで、彼自身の歪んだ優越感と空っぽの自尊心を満たしたかっただけなのだ。

優しさは束縛に変わり、気遣いは監視へと姿を変えた。私が彼以外の人間と関わることを極端に嫌がり、最終的には私の未来ごと彼という狭い鳥籠の中に閉じ込めようとした。

あんな男の本性を見抜けなかった自分自身がひどく恨めしい。あの時、少しでも違和感を覚えて引き返していれば、今頃こんな恐怖に怯える夜を過ごすことはなかったのに。

「……考えても、仕方ない」

自嘲気味に呟き、私は洗面所の電気を消した。

喉の渇きを潤すためにキッチンで水を一杯飲み、重い足取りで再び寝室へと戻る。

少しでも眠らなければ。明日は午前中から必修の講義があるし、夕方からはサークルのミーティングも入っている。気力を振り絞って日常を維持し続けなければ、本当にあの男の呪縛に飲み込まれてしまいそうだった。

ベッドに入り、掛け布団を首まで引き上げる。

目を閉じて、無理やり意識を手放そうとした、まさにその時だった。

ブブツ、ブブツ。

静まり返った暗闇の部屋に、スマートフォンの無機質なバイブレーションの音が響き渡った。

心臓が、ヒュツと冷たく縮み上がる。

深夜二時半。こんな時間に連絡をしてくるような非常識な友人は、私にはいない。

見なければいい。電源を切つてしまえばいい。頭ではそうわかっているのに、暗闇の中でチカチカと点滅するスマホの通知ランプから、どうしても目を逸らすことができなかった。

何が送られてきたのか確認しなければ、最悪の事態に対処できないかもしれない。そんな強迫観念に駆られ、私は震える指先でスマホを手を取った。

画面を覆っていた指を少しずつずらし、ロック画面に表示された通知を覗き込む。

『通知：user\_99xqr から新しいメッセージが届いています』

まただ。昼間とは違う、全く新しい捨て垢からのメッセージ。

私は唾をゴクリと飲み込み、震える指で画面をタップしてアプリを開いた。

表示されたメッセージのレビュー画面を見た瞬間、全身の血が一瞬にして沸騰し、そして氷のように冷たく凍りついた。

そこにあつたのは、これまでの『許してくれ』『声が聞きたい』といった、未練たらたらで縋り付くような文面ではなかった。

『ふぎけんな。俺の連絡をずっと無視しやがって。自分がどれだけ偉いと思ってるんだ』

『お前なんか俺がいなくて何もできないただの女のくせに』

『俺の心をここまでズタズタにしておいて自分だけ平和に生きていけると思うなよ』

『絶対に許さない』

『お前が泣いて土下座して謝るまで俺は絶対に終わらせない』

『お前の周りの人間もお前の大事なものも全部壊してやる。覚悟しておけ』

黒い感情の塊が、画面越しに直接叩きつけられたような錯覚に陥った。

圧倒的な怒り、憎悪、そして狂気に満ちた暴力的な言葉の羅列。

彼の中で何かが決定的に切れてしまったことが、その文面から痛いほどに伝わってくる。これはもう、ただのストーカーの域を超えている。明確な殺意すら孕んだ、危険すぎる脅迫状だった。

「っ……あ……」

スマホを握る手がガタガタと激しく震え、指の隙間からすり抜けた端末がベッドのシーツの上にポスリと落ちた。

両手で口元を覆い隠しても、喉の奥からヒュツと引き攣ったような過呼吸の音が漏れ出てしまう。

壊してやる。

その言葉が、呪いのように頭の中で何度も反響する。

どうしよう。どうしたらいい。



警察に行く？　でも、実害がないと動いてくれないという話を聞いたことがある。親に相談する？　遠く離れた実家の両親を心配させたくない。麻衣に話す？　彼女のような明るい子を、こんな泥沼に巻き込むわけにはいかない。

誰も頼れない。逃げ場がない。

圧倒的な恐怖と孤独感が、四方八方から私を押し潰しにかかってくる。

私はベッドの上で膝を抱え、小さくうずくまった。

暗闇の中で、自分の荒い呼吸音だけがひどく大きく聞こえる。

明日の朝が来るのが怖い。外の世界に出るのが怖い。

大学という平和な日常の裏側に、鋭いナイフを持った狂気が潜んでいるかもしれない。そう思うだけで、一歩も外に出たくなってしまう。

でも、逃げるわけにはいかない。逃げたら、あいつの思い通りになってしまう。

私は震える身体をきつく抱きしめながら、明けない夜の底で、ただひたすらに震え続けることしかできなかった。

昼休みの学食は、四方八方から押し寄せる学生たちの熱気と騒音で飽和状態だった。

食器がトレイの上でカチャカチャとぶつかる音、あちこちで上がる笑い声、そして誰かが椅子を引く床の摩擦音。普段ならただの活気あるキャンパスのBGMとして聞き流せるはずのそれらの音が、今日の私には神経を直接ヤスリで削られているような暴力的なノイズにか聞こえなかった。

広い学食の一角、四人掛けのテーブル席の窓側に座りながら、私は手元にある冷製パスタをフォークで意味もなくかき混ぜていた。

一口も食べていない。胃がキュツと硬く縮み上がり、食べ物を受け付けることを拒絶しているのだ。

視界の端を、見知らぬ男子学生が通り過ぎるたびに、ビクツと肩が跳ねる。すれ違う人間の誰もが、私を監視しているストーカーの差し金なのではないかと疑ってしまう。誰かのスマートフォンが鳴るだけで、あの狂気に満ちたメッセージの続きが送られてきたのではないかと心臓が縮み上がる。

午前中の講義も、全く内容が頭に入ってこなかった。教授の声は遠くのくぐもったノイズのように響き、ノートにはただ無意味な波線が書き殴られているだけ。常に背後や窓の外を気にし続け、不審な影がないかを探すという異常な精神状態だった。

「綾乃、大丈夫？ 顔色、すつごく悪いよ。クマもひどいし」

向かいの席に座っていた麻衣が、心配そうに私の顔を覗き込んできた。

その隣に座っている、同じ学部で仲の良い友人の沙耶も、手に持っていたお箸を止めて深く頷いた。

「そうだよ。朝からずっと上の空だし、ビクビクしてるっていうか……。パスタも全然減ってないじゃん。どっか具合悪いんじゃないの？」

二人の真っ直ぐで優しい視線が、今の私にはひどく眩しくて、同時に申し訳なきで胸が締め付けられるようだった。

私は強張った顔の筋肉を無理やり動かし、努めて自然に見えるように微かに口角を上げた。

「ううん、大丈夫だよ。ごめんね、心配かけちゃって。……ちよつと最近、夜なかなか寝付けなくて、完全な寝不足なだけ。体調自体は悪くないから」

精一杯の嘘だった。けれど、長年付き合いのある彼女たちを完全に誤魔化し切れるほど、私の演技は上手くなかったらしい。

麻衣は少しだけ眉をひそめ、真剣なトーンで声を落とした。

「寝不足って……何か悩み事でもあるの？　もしかして、あの大の元カレとか……まだしつこく連絡してきたりしてないよね？」

心臓が、ドクンと嫌な音を立てて大きく跳ねた。

麻衣は私が達也と別れたことを知っている数少ない友人の一人だ。別れ際の彼の異常な執着ぶりも、愚痴として軽くこぼしたことがあった。

凶星を突かれた動揺を隠すため、私は慌ててパスタを一口無理やり口に押し込み、曖昧に首を横に振った。

「そんなことないよ。あの人とはもう完全に終わったし、連絡先も全部ブロックしてるから。本当に、ただの不眠症気味なだけ。課題のことも気になってたしね」

無理して笑って見せても、二人の顔から心配の色が消えることはなかった。

沙耶が、私の手元にある震えそうになる指先をそつと上から握ってくれた。彼女の手のひらは、ひどく温かった。

「綾乃が言いたくないなら無理にとは言わないけどさ。でも、私たち友達でしょ？ 何かあったなら、いつでも相談乗るからね。一人で抱え込まないでよ」

「うん、そうだよ。もし誰かに嫌なことされてるなら、私たちがいつしよに怒ってあげるし、守ってあげるから」

麻衣も身を乗り出して、力強くそう言ってくれた。

その優しさが、痛かった。

張り詰めていた心の糸がぷつりと切れて、思わずすべてを打ち明けてしまいそうになる。

昨日の夜、とんでもなく恐ろしい脅迫状が届いたこと。今も誰かに監視されているかもしれない恐怖に苛まれていること。助けてほしいと、彼女たちの腕の中で泣きじゃくることができたら、どれほど楽だろうか。

しかし、私の脳裏に、昨夜のあの真っ黒なメッセージがフラッシュバックする。

『お前の周りの人間も、お前の大事なものも、全部壊してやる』

だめだ。絶対に言えない。

麻衣も沙耶も、明るくて心優しく、私にとってかけがえのない大切な友人たちだ。だからこそ、あの男のドロドロとした狂気の渦に彼女たちを巻き込むわけにはいかない。

もし私が相談したことで、彼女たちにまで実害が及んだら。彼女たちの笑顔が、あの男の悪意によって奪われてしまったら。

そんなこと、絶対に耐えられない。自分の身の危険以上に、周囲に危害が及ぶことへの恐怖と忌避感が、私の口を固く閉ざさせた。

「……ありがとう、二人とも。その気持ちだけで、すつごく嬉しい。でも、本当に大丈夫だから。今週末はゆっくり寝て、ちゃんと復活するね」

私は彼女たちの手を軽く握り返し、今度こそ本物の感謝を込めて微笑んだ。

私が頑なに「何もない」という態度を崩さないことを見て取ったのか、二人は小さく顔を見合わせ、それ以上深く詮索してくることはなかった。

「わかった。でも、無理だけは絶対にしないでよ」

「うん。約束する」

そう答えた私の声は、ひどく空虚に響いていた。

友人たちの温かな優しさに束の間の安堵を覚えながらも、私は「やはり巻き込むことはできない」という孤独な決意を、心の奥底でさらに強固なものにするのだった。

\*

午後からの三限目は空きコマだったため、私は図書室の隅の席で息を潜めるようにして時間を潰した。

そして迎えた四限。学部共通の必修科目である「社会学概論」は、百五十人以上を収容できる階段状の大教室で行われる。教室内はすでに多くの学生で埋まりつつあり、あちこちから話し声が響いていた。

この大教室には、横に長い一つの机に三つの椅子がくつついているタイプの座席が等間隔に並べられている。基本的には、一つの机に対して真ん中の席を空け、両端に二人で座るのが学生間での暗黙のスタンダードとなっていた。

教室の中央より少し後ろ、窓から二列目の席の左端。そこに陣取る瀬戸綾乃の隣――同じ机の右端の席は、周囲が次々と埋まっていく中でもポツンと空席のままだった。

しかし、それはキャンパス内において特に珍しい光景ではない。

綾乃に軽い気持ちで座ろうとする男子学生は、現在では皆無に等しい。入学当初こそ、その目を引く容姿に惹かれて、下心見え見えで距離を詰めようとする輩が後を絶たなかった。

だが彼女は、そうしたアプローチに対して徹底的な塩対応を貫き通した。講義中に話しかけられても冷たくあしらひ、連絡先を聞かれても毅然と一蹴する。その結果、「瀬戸綾乃はガードが固すぎる」「下手に声をかけると公開処刑される」という噂が男子の間に定着し、今では軽い連中が彼女に近づくことはなくなったのだ。

ごく稀に、事情を知らない他学部の学生や留年した上級生が同じように絡んでくることもあったが、それらも彼女は完全に無視をして撃退してきた。ゆえに今、綾乃の隣に座る男子がいるとすれば、それは「良い席がなく、純粋に勉強をするために仕方なく座る」という他意のない真面目な学生だけである。彼らは美人の隣という状況にどこか申し訳なさそうに縮こまることが多いのだが、綾乃自身はそんな彼らを『チャラチャラした連中よりよほど大学生らしくて尊敬できるのに』と内心好意的に見ていた。

とはいえ、必修科目ということもあり、基本的には隣が空席のまま講義が始まることは少ない。今日もいずれ誰かが座るだろう。

私はそう思いながら、バッグからルーズリーフを取り出そうと視線を落とした。

その時だった。

ふいによぎった影が視界を遮り、私の隣——空いていた右端の席に、誰かがドカッと腰を



下ろした。許可を求める言葉も、遠慮する素振りもない。真ん中の一席分が空いているとはいえ、長身の男が座ると途端に空間が狭く感じられる。

少し驚いて顔を上げると、そこには薄手の黒いシャツを羽織った見知った姿があつた。

成海朔也だ。

「……成海くん。珍しいね、こんな前に座るなんて」

私の驚きを気にする様子もなく、成海は面倒くさそうに片手で前髪をかき上げながら小さく息を吐いた。

「ん。いつもの後ろの席、あいつらに占領されててさ。うるさいからこつち来た」

「あいつらって、サークルの人たち？」

「そう。講義中ずっと合宿の飲み会の話とか聞かされるの、さすがにだるいから」

成海はそう言いながら、肩に下げていた黒いメッセンジャーバッグを無造作に真ん中の空席に放り投げた。

同じ学部で一年以上過ごしているため、こうして講義で顔を合わせること自体は初めてではない。だが、隣同士の席になるのはおそらく初めてのことだ。

彼は普段、もっと目立たない教室の最後列に座って寝ているか、タブレットで映画を見て

いるか、はたまた友人に出席カードの提出だけを頼んでサボっているかのどれかだ。私のよ  
うな、教授の目が届きやすい前方の席に座ること自体が珍しいのだ。

「そっか。まあ、確かにここは静かだけど」

「この必修、マジでだるいよな。出席点だけで評価決まるから切るに切れないし。早く帰  
りたいわ」

成海は大きな欠伸を一つ噛み殺し、バッグの中からシャープペンシルを一本だけ取り出し  
て机の上に転がした。ノートや教科書を出す素振りすらない。

「成海くん、それだけ？ 今日レジュメ配られる日だよ」

「ああ、それは前のやつにもらって写真撮るからいい。どうせ教授が配るレジュメ、教科書  
の丸写しだし」

悪びれもせずに言い切る彼に、私は呆れるやら感心するやらで小さく息を吐いた。

やがて、教室のスピーカーから予鈴のチャイムが鳴り響き、初老の教授がマイクを持って  
教壇に立った。

講義が始まると、私はいつも通りルーズリーフに向かい、教授の板書を丁寧に書き写し始  
めた。

しかし、どういうわけか、今日はやけに隣の成海が存在が気になって仕方がなかった。

普段、真面目に講義を受けている姿など想像もつかない彼が、一体どうやって時間を潰しているのか。ただの好奇心だった。

シャープペンシルを動かしながら、視線だけを横に滑らせて彼の様子を窺う。

成海は机に肘をつき、手のひらに顎を乗せた体勢で、気怠そうに前のスクリーンを見つめている。

時折、教授の話に合わせて小さく頷いているようにも見えるが、その瞳の焦点が合っているのかどうか、横顔からは判別がつかない。ただ、窓から差し込む午後の光が彼の整った鼻梁と長いまつ毛に影を落とし、その横顔がまるで絵画のように完成されていることだけは嫌でも認識させられた。

こんなに不真面目な態度なのに、成海は成績優秀なのだ。

思い出すのは、一年生の頃の後期にあった『マクロ経済学』のテスト返却時のこと。その科目は教授の採点が非常に厳しいことで有名で、学部内でも「単位を落とす鬼門」と恐れられていた。

テスト返却日、教授は「今回、極めて優秀な成績を収めた上位三名の点数と名前を発表し

ます」と珍しく教壇で宣言したのだ。

その時、三位と二位の学生は八十点台で、それだけでも周囲からどよめきが起きていた。しかし、教授が読み上げたトップの成績は、桁外れだった。

『一位は……99点。成海朔也くん。素晴らしい理解度です』

その名前が呼ばれた瞬間、教室内は一瞬静まり返り、その後爆発的なざわめきに包まれた。

講義をサボることも多く、出席していても後ろで寝てばかりいるような彼が、二位に圧倒的な差をつけてのほぼ満点。

私もそのテストにはかなり苦戦し、なんとか七十点台をもぎ取るのがやっとだったため、その結果には少なからず衝撃を受けた。

成海はその時も、周囲の驚愕の視線を浴びながらも全く表情を変えず、ただ「どうも」と気怠げに返事をして答案を受け取りに行っていた。

決してガリ勉ではない。勉強に熱心に取り組んでいる素振りも見せない。なのに、やらせれば誰よりもできる。

その飄々とした態度の裏に隠された底知れないポテンシャルと、サークルでも見せる人脈

の広さ、そしてあの容姿。

学部内で彼が男女問わず一目置かれ、どこか特別な存在として扱われている理由は、まさにこの「余裕」と「ギャップ」にあるのだろう。

「……？」

不意に、成海がわずかに顔を動かしたため、私は慌てて視線を黒板へと戻した。

心臓が少しだけトクンと跳ねる。見とれていたわけではない。ただ、少し観察していただけた。

数分後、再びそつと隣を窺うと、成海はすでに前のスクリーンを見るのをやめ、机の下に両手を隠してスマートフォンをいじり始めていた。

長い指が慣れた手つきで画面をタップしている。完全に講義からログアウトして、自分の世界に入り込んでいるようだ。

呆れるほどマイペースで、周りの目など一切気にしていないその姿。

いつもなら「真面目に受けないなら来なければいいのに」と少し冷めた目で見てしまうところだが、なぜだろうか。今日の私には、彼のその自由奔放でブレない姿勢が、奇妙なほど心地よく感じられた。

ふと気がつく、午前中から私の心臓に張り付いていたあの冷たい焦燥感が、少しだけ薄れていることに気がついた。

誰かに見られているのではないかというパラノイア的な恐怖。周囲の雑音がすべて自分を責めているように聞こえた過覚醒状態。

それらが嘘のようにスツと引いていき、教授の単調な声がしつかりと耳に届き始めている。

私の隣には今、成海朔也という大きな異物が座っている。

彼は私を監視するようなねつとりとした視線を向けることもなく、過剰に話しかけてくることもなく、ただそこに存在して、自分の好きなように時間を潰しているだけ。

その「私に執着していない」という絶対的な無関心さと、彼の纏う少しひんやりとした柔軟剤の香りが、私と外部の狂気との間を遮断する見えない防壁になってくれているような気がしたのだ。

彼が隣にいる間は、あの気味の悪いストーカーも手を出してこないだろうという根拠のない安心感。

私は小さく息を吐き出し、シャーペンを握る手に力を込めた。

成海が隣でスマホの画面をスクロールする微かな摩擦音を聞きながら、私はなぜ自分が今、こんなにも落ち着いて講義に集中できているのか、その理由にまだ気がついてはいなかった。

五限目の講義が終了したことを知らせるチャイムが、広いキャンパスに夕暮れの到来を告げるように鳴り響いた。

初夏とはいえ、日が傾き始めるのは思いのほか早い。西の空はすでに濃いオレンジ色に染まり始めており、長く伸びた木々の影がレンガ敷きの通路に黒々と横たわっていた。

今日一日を終えた学生たちが、解放感に満ちた笑い声を上げながら次々と正門へと向かって歩いていく。サークル棟へ向かう者、アルバイトへと急ぐ者、友人たちと飲みに行く相談をしている者。誰もが自分の日常というレールの上を、当たり前のように、そして楽しげに進んでいる。

その平和な光景の只中で、私だけが透明な箱に閉じ込められたかのように、建物の出入り口の隅で一人、身動きすら取れずに立ち尽くしていた。

足が、前に進まないのだ。

頭ではわかつている。日が完全に落ちてしまう前に、少しでも早く帰宅した方がいい。暗くなればなるほど、帰り道に潜む危険性は跳ね上がる。



しかし、スニーカーを履いた両足は、まるでコンクリートの地面に縫い付けられてしまったかのように重く、鉛のような疲労と恐怖が全身の血液をドロドロに淀ませていた。

理由は一つ。五限の講義の真っ最中に、またしてもあの捨て垢から一通のダイレクトメッセージが届いたからだ。

『今、大学の正門の近くにいますよ。講義終わるの待ってるから。一緒に帰ろう』  
その短いテキストを見た瞬間、私は講義室の椅子の上で息をすることすら忘れてしまった。

心臓が肋骨の中で狂ったように暴れ回り、全身から一気に血の気が引いていくのがわかった。

大学の外で、あいつが待っている。

私の行動パターンを把握し、待ち伏せをしている。もし正門を出て、あいつと鉢合わせしてしまつたらどうなる？ 無理やり腕を掴まれるかもしれない。人目もはばからずに罵声を浴びせられるかもしれない。あるいは、刃物のような危険なものを隠し持っている可能性だって、今のあの狂った精神状態なら十分にあり得るのだ。

もちろん、大学の敷地内から最寄りの大きな駅に向かうまでの道のりは、帰宅する大勢の

学生たちでごった返している。大都会のだ真ん中であり、人の目という防犯カメラは無数に存在している。そこでいきなり危害を加えられる可能性は低いだろうと、冷静な部分の思考は告げていた。

問題は、そこから先だ。

ターミナル駅から電車に乗り、私の住むアパートの最寄り駅で降りた後。駅からアパートまでの徒歩十五分の道のりには、古い街灯が数本立っているだけの、人通りの少ない静かな住宅街と、夜になると真っ暗になる小さな公園の横を通らなければならない。

もし、あいつが私の後ろをずっとつけてきていて、あの人気のない暗がりには差し掛かった瞬間に接触してきたら。

誰も助けを呼べない暗闇の中で、あの大柄な男に押し倒されたり、口を塞がれたりする光景が、あまりにもリアルな映像となって脳裏に再生される。

怖い。どうしても帰れない。

私は自分の震える両腕をきつく抱きしめ、壁の冷たい感触にすがるように背中を預けた。

今日は曜日的にサークルの活動もない。麻衣や沙耶たちも、四限までの講義を終えてすでに帰宅してしまっている。私と一緒に駅まで連れて行ってくれる存在は、今このキャンパス

のどこにもいなかった。

いつそのこと、駅前的大通りにある明るいビジネスホテルにでも飛び込んでしまおうか。一晩だけそこに身を隠し、明日の明るい昼間のうちにアパートに戻れば、今日のところはやり過ごせるかもしれない。

しかし、そんなことをしたところで一時的な逃避にしかないのは明白だった。私の口座に入っている仕送りやバイト代に、何度もホテルに泊まれるほどの余裕はない。それに、来週もまた同じように五限まである曜日がやってくる。その度にホテルに逃げ込むことなど不可能だ。根本的な解決には全くならない。

結局のところ、自分の足である門をくぐり、自分の足でアパートまで帰り着くしかないのだ。

このままここに留まって時間を浪費すれば、日は完全に沈み、外は本格的な夜の闇に包まれてしまう。そうなれば、今よりもさらに絶望的な恐怖に怯えながら帰らなければならない。なる。

頭ではすべてを理解している。理解しているのに、どうしても恐怖に打ち勝てない。

お昼の賑やかな学食や、図書室で学生たちが平和に勉強していた光景が、ひどく遠い昔の

ことのように思えて、無性に恋しかった。

私は自分が思っている以上に、あのストーカーの存在によって精神を削られ、深刻なダメージを受けている。その冷酷な事実を、今更ながらに突きつけられていた。

「……よしっ」

小さな声で気合いを入れ、私は強く目を閉じた。

覚悟を決めるしかない。これ以上ここにいても何も状況は好転しない。バッグの紐をきつく握り直し、早歩きで、周囲を警戒しながら駅まで一気に駆け抜けよう。壁から背中を離し、震える足をなんとか一歩、前に踏み出そうとした。まさにその瞬間だった。

「なにしてんだ」

背後から、不意に私の名前を呼ぶ声が降ってきた。

「っ！」

ビクッと肩を大きく跳ねさせ、悲鳴を上げそうになるのを必死に堪えて振り返る。

そこに立っていたのは、ストーカーの男でも、不審者でもなかった。

片方の肩にメッセンジャーバッグを無造作に引っかけた、見慣れた長身。少し色素の薄い

髪と、感情の読み取れない気怠げな瞳。

成海朔也だった。

彼は少しだけ首を傾げ、いつものように飄々とした態度で私を見下ろしている。

「講義終わってからずっとあそこで突っ立ってたけど。なんか忘れ物でもした？」

声をかけられるなんて全く予想していなかった私は、驚きと安堵で一瞬頭の中が真っ白になり、パクパクと口を開閉させることしかできなかった。

「あ……えつと……」

立ったままずっと動かずにいた理由を聞かれ、私は激しく動揺した。

なんて答えればいいのかだろう。ストーカーに待ち伏せされていて怖いから帰れない、なんて言えるわけがない。

『友達を待つてる』という嘘が真っ先に思い浮かんだが、待ち合わせにしてはベンチに座るわけでもなく、壁の隅で怯えるように張り付いていた私の態度は不自然極まりない。

普段ならもつと気の利いた言い訳の一つや二つ、すぐに口から出てくるはずなのに、恐怖でパニック寸前だった私の脳は完全にフリーズしてしまっていた。

私が珍しく言葉に詰まり、視線を彷徨わせっていると、成海は小さく息を吐いて次の質問を

投げかけてきた。

「友達は？」

「えっ、あ、今日は……みんな遅くても四限で上がってるから、もう帰ったよ」

咄嗟に、正直な事実だけを答えてしまう。

答えた直後、私は内心で『しまった』と激しく後悔した。友達がすでに帰っていると宣言してしまえば、いよいよ『じゃあ誰を待つて、何のためにあんなところで立ち尽くしていたんだ』という追及を躲すことができなくなる。

自ら墓穴を掘ってしまった。どう取り繕おうかと、必死に頭をフル回転させる。

しかし、成海は私の焦りを見透かしたかのように、ただ短く「ふーん」とだけ呟いた。

追求してこない。彼特有の、他人に深く踏み込みすぎない、あの淡泊な態度だ。

それから、二人の間に数秒の沈黙が流れた。

周囲を通り過ぎていく学生たちの足音や話し声だけが、妙に大きく聞こえる。オレンジ色の夕日が、彼の端正な横顔に深い陰影を作り出していた。

この気まずい沈黙をどうやって破ろうか。適当にごまかして、急いで立ち去った方がいいのだろうか。

私がそう考えて息を吸い込んだ時、先に口を開いたのは成海の方だった。

そこから発せられたのは、およそ私が予想すらしていなかった、唐突すぎる言葉だった。

「このあと、暇か？」

「……え？」

私は間の抜けた声を出し、彼の顔をまじまじと見つめ返してしまった。

成海はポケットに両手を突っ込んだまま、特に照れる素振りもなく、まるで『今日の天気はどうだ』とでも聞くようなフラットなトーンで続けた。

「駅前の『鳥〇族』に行こうと思ってるんだけど。暇なら一緒にどう？」

あまりにも予想外すぎる誘いに、私の思考は完全に停止した。

成海朔也から、ご飯に誘われた。

入学してから一年以上、同じサークルで同じ学部にながら、まともに会話する機会だつてて滅多にないというのに。彼の方から私を個人的に誘ってくるなんて、今までの彼の態度からは全く想像もつかないことだった。

なぜ、私を？

彼のような人脈の広い男なら、一緒に飲みに行く友人などいくらでもいるはずだ。わざわざ

ざ私を誘う理由がわからない。

もしかして、私がかしらの理由があつて一人で帰れずに困っていることを、その鋭い観察眼で悟られたのだろうか。だとしたら、彼は彼なりのやり方で気を遣つて、私を助け出そうとしてくれたのだろうか。

可能性としては、それしか思いつかなかつた。彼が下心で私を誘っているようには、どうしても見えなかつたからだ。

だが、今の私にとって、彼の真意がどこにあるのかなんて、実はどうでもいいことだつた。

一人で暗闇の中を帰りたくない。誰でもいいからそばにいてほしい。そんな極限の精神状態だつた私にとって、彼のその一言は、天から垂らされた絶対的な蜘蛛の糸のような、紛れもない『救済』だつたのだ。

「……空いてるけど。二人で？」

私は震えを隠すように、なるべく平坦な声を作つて聞き返した。

確認しておきたかつたのだ。彼が普段よく一緒にいる、あのチャラチャラとしたノリの男子グループも一緒なのかどうかを。



もし彼らがいるのなら、それはそれでストーカーに対する防壁としては強力かもしれない。だが、私はあの一部の男子たちの、私を値踏みするような視線やガツガツした態度があまり得意ではなかった。恐怖心からの安心感は得られても、精神的な疲労は別のベクトルで蓄積してしまう。

「そうだけど」

成海はあつさりと肯定し、それから少しだけ目を細めて付け加えた。

「嫌なら別にいいけど」

「ううん、行く」

私は彼が言葉を取り消してしまう前に、食い気味に首を横に振って即答した。

付き合ってもいない男子と二人きりで夜ご飯に行くなんて、普段の私なら絶対にあり得ない行動だ。

けれど、この時の私は少しの迷いもなく彼の誘いに乗っていた。状況が状況だったという切羽詰まった理由もあったが、何より、四限の隣の席で感じた彼のあの『心地よい無関心さ』に、嫌な気がしなかったというのが最大の事実だった。

「そ。じゃあ行こ」

成海は短く応じると、私を待つでもなく、先に立ってゆつくりと歩き出した。

私は慌ててバッグを抱え直し、その広く頼もしい背中を追うようにして、彼と並んでキャンパスを歩き始めた。

＊

「……んー、瀬戸、なんか頼みたいのある？」

駅前にある大手焼き鳥チェーン『鳥○族』の喧騒の中。

向かいの席に座る成海が、手元のタッチパネル型タブレットを操作しながら、メニューの画面をこちらに向けて見せてきた。

店内は平日の夜だというのに、大学生や会社員たちで満席に近い状態だった。あちこちから飛び交う笑い声、グラスがぶつかる音、店員たちの威勢のいい声。

少し前までキャンパスの片隅で怯えていた私にとって、この大衆居酒屋特有のうるさすぎるほどの活気は、逆に世界との繋がりを取り戻したような強い安心感を与えてくれた。

大学を出てここに来るまでの道中、私の心臓はずっと早鐘を打っていた。正門をくぐる

時、駅に向かう大通りを歩いている時、いつあの男がぬつと姿を現すか気が気ではなかったのだ。

しかし、成海と並んで歩いていたおかげか、結局ストーカーが私の前に姿を現すことはなかった。

バッグの中に隠したスマホにも、あれ以降ダイレクトメッセージは一件も届いていない。あれだけ『外で待っている』と脅してきたのに、接触してこなかった事実。それが逆に『どこかで隠れて監視しているのではないか』という不気味な不安要素にもなっていた。だが、少なくとも今、私は物理的に安全な明るい室内にいて、目の前には私を気にかけてくれた同級生がいる。今はとにかく、この束の間の安心に身を委ねたかった。

「あ、うん。見せて」

私は嫌な考えを強引に頭の隅へと追いやり、彼からタブレットを受け取った。どうせ来たのだから、今は目の前の食事と彼との時間に集中しよう。

アルコールは飲みたい気分だったが、酔って判断力が鈍るのは避けたかった。

「私は、カシスウーロンにする。あと、焼き鳥のねぎまと、砂肝も少し頼んでいい？」

「おう、好きに頼みな」

私がメニューを選択して注文リストに入れると、すでに成海が選んでいたハイボールといくつかの串焼きのメニューがずらりと並んでいた。私はそのまま注文確定のボタンを押す。タブレットをテーブルの端に戻すと、注文した品が届くまでの間、手持ち無沙汰な時間が訪れた。

私は目の前に置かれた取り皿の縁を指でなぞりながら、少しだけ躊躇した後に口を開いた。

「成海くん、一人でもこういうところ来るんだね。友達と飲みに行ったりはしないの？」  
サークルでも常に人に囲まれているイメージだったから、彼が一人で大衆居酒屋に行こうとしていたことが意外だったのだ。

「行く時もあるし、一人の時もあるよ。今日はただ、無性に一人で焼き鳥食って酒飲みたい気分だっただけ」

成海はおしぼりで手を拭きながら、気負う様子もなくそう答えた。

「そうなんだ」

確かに彼のイメージとしては一人でお酒を飲んでいる様子も目に浮かぶ。

「瀬戸は？ 普段放課後とかなにしてんの」

頬杖をつきながら、成海から適当な感じで質問が投げ返される。

「私は……普通に直帰するか、麻衣たちとカフェでお茶するくらいかな。バイトがない日は家で本読んだり、映画見たりしてる」

「へえ。真面目だな。映画って、どんなの見んの？」

「最近はミステリーとかサスペンスが多いかも。成海くんは前にフランス映画見てたよね」  
「ん。昔のやつな。映像の退廃的な雰囲気が好きでさ」

そこから、お互いの好きな映画のジャンルや、最近見た作品の話へと自然にスライドしていった。

彼の相槌は相変わらず少し気怠げで、テンションが高いわけではない。けれど、私の話をちゃんと聞いて的確な感想を返してくれるし、彼の口から語られる映画の知識は、意外なほど深く、興味深いものだった。

話しているうちに、私は自分でも驚くほど自然に笑っていることに気がついた。

同じサークルにいても、こんな風に彼と向かい合って、お互いの趣味についてしっかりと話したのは初めてのことだ。顔と頭が良くてマイペースなどこかわっている男くらいの印象だった彼の中に、確かな知性と、自分だけの静かな世界が広がっているのを感じた。

やがて運ばれてきた焼き鳥をつまみ、お酒を少しずつ飲みながら、私たちの雑談は途切れることなく続いた。

大学の講義の愚痴、サークルの人間関係の適当な観察、くだらない日常のワンシーン。何の変哲もない、普通の大学生の普通の飲み会。

だが、私にとって特筆すべきことが一つあった。

それは、店に入ってから食事を終えるまでの約二時間の間、成海が自分のスマートフォンをテーブルの上に出すことも、ポケットから取り出して画面を確認することも、ほとんどなかったという事実だ。

今時の大学生なら、誰かと食事をしていても無意識にスマホを触り、SNSをチェックしたり通知を見たりするのが当たり前の光景になっている。ましてや彼は授業中やサークル中に一人で携帯で映画を見たりするような性格。

けれど今の彼は、まるで目の前にいる私との会話だけに集中しているかのように、一度もその視線を小さな画面へと逃がすことはなかった。

その彼特有の『余裕』と『目の前の人間への向き合い方』が、私の冷え切っていた心を、カシスのアルコールとは違う心地よい熱でゆつくりと温めてくれているような気がした。

少なくともこの時間だけは、見えないストーリーカーの恐怖を忘れ、私はただの瀬戸綾乃という一人の女子大生として、心から息をつくことができていたのだ。

居酒屋の引き戸を開けると、エアコンの効いた賑やかな店内から一転、初夏の夜特有の少し湿気を帯びた生温かい空気が全身を包み込んだ。

駅前のロータリーは、家路を急ぐ会社員や学生たちでごった返しており、街灯や飲食店のネオンがアスファルトを毒々しいほど鮮やかに照らし出している。

外はもう、すっかり完全に暗くなっていた。

私が店を出てから小さく息を吐き出していると、後ろから会計を済ませた成海が「ごちそうさまです」と店員に軽く頭を下げて出てきた。

「おごるよって言ったのに。成海くん、律儀だね」

「別に。自分が食った分くらい自分で払うよ。それに、誘ったの俺だし」

成海は首の後ろを軽く手で押さえながら、気怠そうに答えた。

食事中もそうだったが、彼は決して見栄を張ったり、無駄に男らしさをアピールして私より優位に立とうとしたりしない。気負いのなさが、私にとっては一ひどく居心地が良かった。

「……帰るか」



成海が短い言葉と共に、自然な動作で駅の方角へと歩き出す。私もそれに合わせて、並ぶようにして歩き始めた。

お互いに電車通学のため、向かう先は同じ大学の最寄り駅だ。アルコールがほんの少しだけ入ったことで、張り詰めていた神経が適度にほぐれているのを感じる。

道中、私たちは食事の時の和やかな空気のまま、会話を続けた。

「そういえば、次のサークルの合宿、岐阜だよ。成海くん、行くの？」

「一応な。俺、なぜか班長の一人に組み込まれてるし。行くしかないだろ」

「あはは、災難だね。でも、成海くんが班長なら、みんな勝手にやってくれそうに楽しそうだけど」

「いや、それが一年生が結構うるさくてさ。どこに行きたいとか、夜はバーベキューがいいとか、要望ばっか出してくるからマジでだるい」

面倒くさそうに顔をしかめながらも、彼の口調にはどこかサークルの連中に対する呆れ混じりの親愛が滲んでいる気がした。

歩幅を合わせながら横顔を見上げて、私は改めて思う。

成海朔也という男は、外から見ているだけの印象とは違い、本当に意外なほど話しやすい

人間だ。変に私の顔色を窺うこともなく、かといって土足で踏み込んでくることもない。彼との会話はキャッチボールというより、ただ同じ方向を向いて歩きながら、ぽつりぽつりと石を蹴り合うような、そんな気楽さがあった。

けれど。

会話が弾み、口元に笑みが浮かぶ一方で、私の頭の片隅には常にドス黒いシミのような不安がこびりついて離れなかった。

結局、このあと電車に乗って、自分の最寄り駅に着く頃には、私は一人になってしまっただ。

いくらこの瞬間が楽しくて、安全であったとしても、それは一時的な魔法に過ぎない。タミナル駅を過ぎれば彼は別の路線に乗り換えるか、あるいは違う方向へと帰っていく。

そして私は、あの大都会の喧騒から切り離された、静かで暗い住宅街の道を、たった一人で歩いてアパートまで帰らなければならないのだ。

ストーカーの男は、本当に諦めて帰ってくれたのだろうか。

私が誰か他の男と一緒に居酒屋に入ったのを見て、今日のところは手出しできないと判断して引き下がったのかもしれない。そうであってほしいと、心の中で何度も祈るしかなかった。

た。

どうか、もう私の日常を壊さないで。一人で帰るあの暗い道に、あの狂気を含んだ影が潜んでいませんように。

表面上は合宿の話題に相槌を打ちながらも、私の胃の奥は徐々に、冷たい氷の塊を飲み込んだように重く、硬くなっていた。

やがて、人の波に揉まれながらターミナル駅の巨大な改札口へと辿り着く。

ICカードをタッチして自動改札を抜けたところで、私は少し歩みを緩めた。ここから先は、利用する路線によって向かうホームが変わる。

「成海くんは、何線？」

お別れの挨拶をする準備をしながら、なるべく明るい声を作って尋ねる。

すると、成海は改札の先の案内板をちらりと見上げてから、何の気なしに答えた。

「俺？　〇〇線だけど」

「えっ」

私は思わず、間の抜けた声を出してしまった。

「……奇遇だね。私も同じ路線だよ」

「マジ？　じゃあ一緒じゃん」

方面が同じだったという事実には、私の胸の内で安堵の波が大きく広がった。もう少しだけ、彼と同じ空間にいられる。そのことが、今の私にはどれほど救いだったか。

私たちは並んでエスカレーターを上り、地下深くにあるホームへと向かった。帰宅ラッシュのピークは過ぎていたものの、ホームにはまだ多くの人が列を作って並んでいる。

列の最後尾につきながら、私はなんとなく気になって成海に尋ねてみた。

「成海くんって、最寄り駅どこなの？　同じ路線って知らなかったから、ちよつとびつくりしちゃった」

今まで一度も電車で遭遇したことがないから、きつとかなり離れた駅なのだろう。そんなふうに予想していた。

しかし、成海から返ってきた答えは、またしても私の予想を裏切るものだった。

「△△駅だけど」

「……え、△△駅？」

私は思わず目を丸くして彼を見上げた。

「うん。なんで？」

「だって、私の最寄り駅の、二つ先だよ。案外近いんだね」

「へえ、そうなんだ。じゃあ瀬戸は××駅か」

成海は特に驚く様子もなく、ただ淡々と納得したように頷いた。

彼が私の生活圏のすぐ近くに住んでいたという事実は、少しだけ不思議な感覚だった。今まで全く交わることのなかった二つの平行線が、今日のこの数時間で、急激に距離を縮めて交差していくような錯覚を覚える。

間もなくして、生ぬるい風と共に電車が滑り込んできた。

ドアが開き、吐き出される客と入れ替わるようにして車内へと乗り込む。時間も時間のため、車内は疲れた顔をした社会人たちを中心に、そこそこの混雑を見せていた。座席は完全に埋まっており、私たちはドアのすぐそば、窓を背にする形で並んで立つことになった。

扉が閉まり、電車が動き出す。

ガタン、ゴトンという規則正しい走行音だけが、車内に単調に響き渡る。

隣に立つ成海は、特に話しかけてくることはなく、ポケットに片手をつっ込んだまま、ぼんやりと窓の外の暗闇を流れる街の光を見つめていた。

居酒屋にいた時とは違う、沈黙の空間。

私も彼に倣うように、窓ガラスの向こうへと視線を向けた。夜の窓ガラスは鏡のようになっていて、私の疲れた顔と、隣で微動だにしない成海の横顔を薄っすらと映し出している。

電車が駅に停車し、また発車する。

その繰り返しの中で、私の胸の内に巣食っていた不安の黒いシミが、じわじわと形を伴って再び大きく膨れ上がり始めていた。

アルコールが抜けていくにつれて、現実が冷酷に押し寄せてくる。

あと数駅で、私はこの電車を降りなければならぬ。

この明るく、人がたくさんいる安全な車両から、あの暗い夜道へと一人で踏み出さなければならぬのだ。

確実に接触してくるという明確な根拠があるわけではない。居酒屋に入ってから時間もかなり経っているのだから、あいつは待ちくたびれてとうの昔に帰ってしまったている可能性も十分にある。頭ではそう自分に言い聞かせるのに、どうしても最悪の想像ばかりが脳裏を駆け巡る。

アパートの前で待ち伏せされていたら。

背後から突然口を塞がれたら。

もしもの時のために、防犯ブザーを手の届く場所に移動させておこうか。それとも、駅に着いたら親に電話をかけながら歩いた方がいいだろうか。

そんなことばかりをぐるぐると考え、無意識のうちにバッグの持ち手を握る指先に力がこもっていく。

留まっていた電車が再び走り出す。

『次は、××駅、××駅』

車内アナウンスが、無情にも私の最寄り駅の名を告げた。

心臓が、ヒュッと縮み上がる。

終わってしまった。束の間の平穏な時間が。ここから先は、自分の力でなんとかするしかないのだ。

私は小さく深呼吸をして、覚悟を決めた。

電車がゆっくりとホームに滑り込み、プシューツという音と共にドアが開く。

「……成海くん」

私は振り返り、隣に立つ彼に向けて、周囲の迷惑にならないよう抑えた声で言った。

「ここで降りるね。今日は、本当にありがとう。すごく楽しかったし……助かった」  
「おう」

成海は短く答え、軽く片手を上げた。

私は彼に小さく頭を下げ、人の波をすり抜けるようにして電車を降りた。

ホームの冷たい風が、火照った頬を撫でる。

一人になった。

周囲の警戒度を最大まで引き上げ、足早にエスカレーターへと向かおうとした、その時だった。

背後から、私が降りたドアから、もう一人誰かが降りてくる気配がした。

ストーカーかもしれないという恐怖で一瞬身を固くしたが、すぐにその足音が私のすぐ横に並んだ。

驚いて横を向くと、そこには電車の中に残っているはずの成海が、普段と変わらない気怠げな足取りで歩いていた。

「えっ……成海くん？」

私は目を白黒させ、完全に立ち止まってしまった。



「なに？」

成海も立ち止まり、首を傾げて私を見下ろす。

「なに、じゃないよ。成海くんの最寄りには、二つ先じゃん。どうして降りたの？」

私が混乱して問い詰めると、成海はまるで「今日の晩飯はカレーだ」とでも言うような、あまりにも平坦なトーンで答えた。

「家まで送る」

「え？」

私は息を呑んだ。

家まで送る。その言葉の意味が、すぐには理解できなかった。

彼の顔を見上げるが、その整った表情からは一切の感情が読み取れない。下心があるようなニヤけた顔でもなければ、無理をしているような引きつった顔でもない。ただただ、風いだ湖面のようにフラットなのだ。

「どうして……？」

私はたまらず聞き返した。

彼が送ってくれるという提案に、私の内心は歓喜し、ひどく安心してしまっていた。それ

でも、聞かずにはいられなかった。なぜ、接点の少ない私にそこまでしてくれるのかを。

すると成海は、私の質問の意図がわからないといった様子で、小さく息を吐いた。

「どうしてって。こんな時間だし、女の子一人で帰らせるのは危ない。送るのが普通だろ」  
普通だろ。

彼は本当に、心の底からそれが『当たり前前行為』であると信じて疑っていないような言い方をした。

その言葉の響きが、どれほど私の凍りついた心を溶かしたか、彼は絶対に気づいていないだろう。

私がストーカーに怯えている事情など知らなくても、彼はただ『こんな時間に女の子を一人で歩かせるのは危ないから』という極めてシンプルで善意に満ちた理由で、わざわざ自分の駅を通り越してまで私を守ろうとしてくれたのだ。

こんなにも無防備で、押し付けがましくない気遣いがあるだろうか。

不意に、目頭が熱くなるのを感じた。

一人で戦わなければならないと思っていた暗黒の夜道に、彼という強力な光が差し込んだ瞬間だった。

「ほら、行くぞ」

彼はそれ以上私に反論する隙を与えず、先に立って改札の方へと歩き出した。

私はワンテンポ遅れてハッと我に返り、小走りで彼に追いついた。

「成海くん」

隣に並び、彼の袖口をほんの少しだけ摘む。

「……ありがと」

小さく、けれど心の底からの本音をこぼすと、成海は前を向いたまま「ん」とだけ短く返事をした。

\*

駅の改札を抜け、ロータリーから一本路地に入ると、周囲の景色は一気に色を失い、静寂と暗闇に支配された住宅街へと姿を変えた。

「次の交差点を、右に曲がって」

「……?」

「うん。そこからしばらく真っ直ぐ」

私が時折曲がる道を教えながら、私たちは肩を並べて夜道を歩いていた。

普段の私なら、何も考えずに音楽を聴きながら通り過ぎるだけの見慣れた帰路だし、今日は違った。

等間隔に立つ街灯の光は心許なく、コンクリートの壁に落ちる自分たちの影すらも、まるで別の生き物のように不気味に歪んで見える。どこかの家から漏れ聞こえるテレビの音や、遠くで犬が吠える声が、やけに鮮明に耳に届き、神経を過敏に逆撫でする。

改めて、背筋が寒くなるのを覚えた。

もし彼と一緒にいてくれなかったら、私はこの暗い道を一人で歩いていたのだ。

曲がり角の暗がりや、電柱の影。どこにあのストーカーが息を潜めているかわからない。

そんな極限の恐怖状態のまま、たった一人でこの道を帰れるわけがなかった。きつと、パニックになって走り出すか、その場にうずくまって泣き出していたかもしれない。

だからこそ、すぐ隣を歩く成海が存在が、今は何よりも心強かった。

彼がいるというだけで、不気味な夜道もなんとか自分の足で歩くことができる。

今度、きちんとお礼をしないと。

そんなことを思いながら、私は横を歩く成海をこつそりと盗み見た。

前を見据えて歩く彼の横顔は、大学で見かける時と何も変わらない、気怠げで落ち着いた様子のままだった。

当然といえば当然なのかもしれない。彼は私がストーカーに狙われていることなど知らないのだから。それでも、彼が何かに怯えたり、過剰に周囲を警戒したりすることなく、ただ堂々と私の隣を歩いてくれていることが、私にとっては最大の救いだった。

やがて、道中の中間地点にある小さな公園の横に差し掛かった。

ここは街灯が少なく、うつそうとした木々が生い茂っているため、私が帰り道の中で最も恐怖を感じていた場所だ。

無意識に足取りが重くなり、成海の方へと少しだけ身を寄せてしまう。

しかし、成海は歩調を変えることもなく、ただ静かに公園の横を通り過ぎていく。彼がいとも通りでいてくれるおかげで、私も変に怯えることなく、無事にその魔の区間を通り抜けることができた。

安堵の息を漏らす。

そこからさらに数分歩き、見慣れたアパートの建物が視界に入ってきた。

「……あ、成海くん」

私は足を少し緩め、改めて彼に声をかけた。

「あの、茶色いレンガの建物。あそこの二階だから、もう着くよ」

ここまで送ってもらえれば十分すぎるほどだ。あとは小走りで階段を駆け上がり、鍵を開けて部屋に飛び込むだけ。

そう思ったのだが。

そこから数歩歩いたところで、成海はふと、ピタリと足を止めたのだ。

「……？」

急に隣の気配が止まったことで、私は数歩先へ行ってしまう、不思議に思っただけで振り返った。

街灯の下に立ち止まった成海は、私の方を向いたまま動かない。

ああ、なるほど。

私はすぐに合点がいった。

彼は気を遣ってくれたのだ。女の子の家を完全に特定してしまうのは良くないと判断し、建物のすぐ近くまで来たから、ここでお別れして引き返していくつもりなのだろう。

なんて細やかな配慮ができる人なんだろう。

私は彼に対する感謝の気持ちで胸がいっぱいになり、改めてきちんとお礼を言おうとして、口を開きかけた。

「ここまで送ってくれて、ほんとに――」

しかし、その言葉は私の喉の奥で、無惨にも詰まってしまった。

成海が、私を見ている。

街灯のオレンジ色の光に照らされた彼の瞳は、感情の読めない底なしの深い色をしていた。いつもと変わらない飄々とした表情に見えるのに、なぜかその視線は、私の身体をその場に縫い付けるような強烈な圧を持っていた。

ただ一つ、直感的にわかったことがある。

彼は、私が予想したような『気を遣ってここで別れるため』に足を止めたわけじゃない。何か、別の理由がある。

彼は私をじっと見つめたまま、一瞬たりとも目を逸らさない。その張り詰めた空気に飲まれ、私もまた彼を見つめ返したまま、完全に身動きが取れなくなってしまった。

二人の間に、数秒間の異様な沈黙が落ちる。

周囲の虫の音さえも遠のいていくような、不気味なほどの静寂。

どうしたのだろう。何か怒らせるようなことを言ってしまっただろうか。それとも、私が何か隠していることに気づいたのだろうか。

沈黙が長引くにつれ、私の心の中に別の種類の不安がじわじわと湧き上がり始めた、まさにその時。

彼はふっと私から視線を外したかと思うと、ポケットから自分のスマートフォンを取り出した。

そして、画面上で素早く何かを操作し始めた。

何をしているのかわからず、私が呆然と立ち尽くしていると、彼はすぐに顔を上げ、私の方へ一歩だけ踏み出してきた。

長い腕が伸び、私の目の前に彼のスマホの画面が突き出される。

その光る液晶画面の文字を視認した瞬間。

「……………」

私の全身の毛穴という毛穴が開き、ゾワリと総毛立つような最悪の鳥肌が駆け抜けた。画面に表示されていたのは、真っ白なメモ帳アプリ。



そこに、黒々とした文字で、ただ一言、こう打たれていた。

『ずっと誰かが後をつけてきている。知り合いか？』

血の気が、完全に引いた。

成海朔也は、気づいていた。

駅を出てから、いやそれよりもつと前から、ずっと背後に張り付いていた底知れない狂気の気配に。